

第13回 明治大学文学賞

阿久悠作詞賞受賞作品について（三田 完）

（全体講評）

四半世紀前の盛夏、阿久悠さんとタクシーに同乗したときのこと——。車が信号で停止したとき、隣の阿久さんが突然「ああいうのが詞になるんだよね」とくぐもった声で呟き、私はあわててその視線を追いました。阿久さんは車窓から中空を見上げています。場所は新宿都庁前でしたが、街の風景に特に変わった様子はない。

信号が青に変わるころ、気がつきました。街路樹の葉が茂って、〈都庁前〉の交通標識をなかば隠している。私たちは信号機が街路樹に隠れることなどないと思いついで日々を送っていますが、夏の陽の烈しさや樹木の逞しさによって、こうした意外な風景が^{しゅつたい}出来することもある——私は勝手に阿久さんの胸のうちを斟酌しました。

頭のなかで巡る思念が詞のテーマになることは間違いないことです。しかし、そういった思念の周囲に思いがけない風景があり、意外な人間の行動がある。そういった風景や行動を小道具にして、思念を色づけしていくのが文芸という行為。阿久さんの頭のなかには、日頃の観察をもとにさぞかし多様な風景や行動が蓄えられていたことでしょう。

今回の応募作は、総じて内向きの作品が多かった印象があります。もっと街の風景や人々の行動を観察し、リズムのある言葉にしてほしかった。

自信を持って大賞に推せる作品を選びえなかったのは、コロナ禍で街を自由に歩けず、詞の小道具を拾えなかった一年ゆえの残念な結果かもしれません。

(作品講評)

「紅葉かつ散る」

下紅葉かつ散る山の夕時雨

ぬれてやひとり鹿の鳴くらむ 藤原家隆

葉が紅く色づくと同時にほらはらと散る風情を表す「紅葉かつ散る」という古語に触発された一篇です。

いにしえの歌に用いられ、いまは俳句歳時記にかろうじて残っている言葉を発掘し、自分に引き寄せた作者の言語感覚に感服しながらも、「関係性」という硬質な言葉の斡旋に違和感を覚えました。

「夜の空想」

韻律の楽しさでメロディーを付けやすい作品です。

別にロジカルな展開はなくてもいいと思うのですが、言葉が並んでいるだけでは平板で、色彩ある立体にならない。ヒゲダンの楽曲をもっと研究してみてもはどうでしょう。

「ありふれたい」

秀逸なタイトルです。誰もが自分らしくありたいと思う時代に、あえて「ありふれたい」と口にするとは。

しかしながら作者は、この歌の状況設定を客観的に語る「ありふれた」サービスをせず、主観的な意識の流れを綴るのみ。結果、読み手（聴き手）は置き去りに。

上記3作のほか、「メロドラマ」、「ちくわ天ブルース」（受付番号1072）が心に残り、計5作をくりかえし吟味した結果、受賞作品を決定しました。大賞該当作がない理由はただ一つ。詞を眺めながら彩り豊かなメロディーを想像できなかつたからです。